Hello, Kids!

小学校英語情報誌

2008 Vol.2-4

特集:子どもの声を聞いてみる

巻頭言 自然な英語を! 新里眞男(東京国際大学教授)……2

子どもの思いや願いを英語にのせて 安田昌則(福岡県大牟田市立明治小学校校長)……3

実践報告 子どもといっしょに創る英語活動 名渕后江(栃木県下都賀郡野木町立新橋小学校教諭)……4

子どもたちが思いを伝え合う本当の意味のコミュニケーション活動 鈴木智子(静岡県沼津市立浮島小学校教諭)……6

Hooray ALT! Christopher Kato(千葉県我孫子市ALT)……8

Say "Hello" with Alison! 根本アリソン(福島県双葉郡大熊町 外国人英語講師)……8

自己表現やコミュニケーション能力につながる活動の工夫を図っています。

子どもたちがゲームを作り出すことで課題に意欲的に取り組んでいます。

栃木県下野市立古山小学校 金久保貴子先生

開隆堂

巻頭言

自然な英語を！

東京国際大学教授　新里 眞男

小学校の先生方が不安に思っているのは，今，自身がやっている活動でよいのかということだろう。識者は，スキルを教えてはいけないとか，音声中心にとか，異文化理解を中心にとか，コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度が重要だなどと，様々なことを言う。しかし，それぞれのねらいを達成するために，教室でどのような活動をすべきかについて具体的な提言することは少ない。まして，活動の善し悪しを判断する際の基準を示してはくれない。はたして，学習指導要領で掲げられた「コミュニケーション能力の素地」の育成のためには，教室でどんな活動をすればよいのか。識者は，それを語るべきではないだろうか。目的論だけでなく方法論も語るべきである。

最近，「自然な英語を教えよう」と言われ始めている。私はこの動きを歓迎したい。小学校英語活動というと歌やゲームが定番だが，これらだけでは基本的に不十分である。英語に対する興味付けはできても，言葉としての英語そのものに触れてはいない。やはり，場面に合った本物のコミュニケーションが必要だと思う。つまり，（簡単な内容であっても）実際に英語を使ってお互いの気持ちや考えをやりとりする活動を行うのである。

たとえば，“How are you?”という表現がある。これが普通の挨拶であれば，“Fine, thank you. And you?”で応答すべきだろう。これに“I'm sleepy.”とか“I'm hungry.”と答えさせるのは不自然である。一人ひとりの子どもの体調を聞いている場面ではないからである。先生方の中には，子どもたちが自分の体調や気分によってそれぞれ違った表現を選択して応答することが自己表現の機会になると考えている方々が多くいる。しかし，挨拶は挨拶であって，それに対して“I'm tired.”と返答されたら，普通は面食ってしまう。つまり，この答え方は挨拶としては不自然なのだ。

今後，外国語活動が全小学校で始まるようになれば，以上のような「自然なやりとり」という尺度はいっそう強調されていくだろう。同時に，大声で歌ったり，ジェスチャーを使って体で大げさに表現させたりすることの意義が問われてくるはずだ。不自然で，わざとらしく，メカニカルな練習は，どんなに楽しそうでも，問題である。

くり返しになるが，「自然な英語」の基準は，やはり，コミュニケーションという考え方である。言葉の基本的な機能は，お互いの情報や考えや気持ちを伝え合うために使うことである。その機能を教室の中で体験させるような「コミュニケーション活動」をもっと追求すべきだと考える。

私の地区の取り組み

子どもの思いや願いを英語にのせて

福岡県大牟田市立明治小学校校長　安田 昌則

1. 大牟田市の取り組み（学級担任が進める英語活動）

大牟田市は，教育特区ではないが，通常の公立小学校における英語活動を平成12年度から全小学校（24校）で取り組み始めた。現在，学校数は23校となったが，各学校の3年生以上で年間35時間，1・2年生については10～15時間程度取り組んでいる。本市の特色である，学級担任が進める英語活動の充実を図るため，教育委員会や各学校では次のような取り組みがなされてきた。

①ネイティブが発音したカセットテープ・CDの作成
②全学年の各時間の指導案を掲載した実践事例集の作成
③英語コンテンツの作成（動画を含んだ指導案編と発音編。現在，インターネットでも公開している。）
④多様なニーズに応じた教職員の研修会の開催
⑤英語活動についての講演会の開催
⑥大牟田市英語活動フェスティバルの開催
⑦全小学校での英語活動に関する研修会の実施

これらの取り組みを通して，各担任は，少しずつ自信を持ちながら英語活動を行えるようになった。

2. 明治小学校の取り組み（多様な英語活動の工夫）

本校は，文部科学省の「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校として，また，国立教育政策研究所の「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」の協力校として，さらに，大牟田市教育委員会の研究協力校として授業や研修を通して，本校なりの英語活動を展開している。特に本年度は，『英語ノート』（試作版）や電子黒板を活用しながら授業の工夫を行っているところである。

このような英語活動の様子を，他校の先生方はもちろんのこと，保護者や地域の方へも授業参観・学習発表会等で公開している。本年の1月には「全国小学校英語活動実践研究大会」の会場校として，また，10月には，文部科学省の拠点校及び大牟田市教育委員会研究協力校として研究発表会を開催したが，多数の参加をいただくことができた。子どもたちが，学級担任と楽しく学習活動を行っている姿に，参観していただいた方々から励ましや称賛の声をいただいた。このような参観者の声で，子どもたちから「もっと英語活動をしたいな」との感想が聞かれている。また，教職員の自信や喜びにもつながっている。本校でも開かれた学校づくりを目指しているが，このように日常的に授業を公開することで，教育活動の充実を図ることができていると感じる。

今後，高学年での外国語活動が必修となるが，外国語活動のねらいはあくまでも，コミュニケーション能力の素地を養うことである。そのために，子どもたちに自分の気持ちや願い等を簡単な言葉で表現する楽しさを味わわせたり，伝え合う喜びを味わわせたりするために各学年の実態に応じながら学習活動の工夫を行うことが求められている。本校の職員室では，学年を超えて英語活動についての教材研究や教材開発についての意見がよく交わされている。教職員も楽しく英語活動に取り組んでいる。だからこそ，子どもたちも意欲的に活動していると思われる。今後も，子どもたちが自分の思いや願いを英語にのせていけるような活動の充実に努めたい。

実践報告

子どもといっしょに創る英語活動

栃木県下都賀郡野木町立新橋小学校教諭　名渕 后江

1. 子どもと歩む

英語活動の実践も8年目になりますと，指導上重要なポイントにいくつか気づくことがあります。「聞く耳」を育てる大切さ，無理に覚えさせたりリピートさせたりすることの無意味さ，児童の現状に合わせながら活動を変更する柔軟さなどです。どれも，数多くの失敗を通して学ぶことのできた宝石のようなポイントです。

また，授業の進め方，カリキュラム，TTのやり方，高学年用の活動など，英語活動を進めるうえで生じる一通りの課題も経験しました。担任が覚えさせるのではなく，児童が自然にくり返すことのできる活動を考え，常に子どもにとって身近で意味のあるコミュニケーション活動を目指して英語活動を進めてきました。

2. 1歩進めたチャレンジ

そんな中，今年は1歩進めて「話すこと」にも意味を持たせ，発話の促進を目指してみました。発話と言っても，単に聞かれたことに答えたりキーセンテンスを言ったりするだけではなく，児童がどうしてもこの言葉を言いたいという必然性から生じる意味のある発話の促進を考えました。「聞く」→「理解する」→「考える」→「話す」という経過をたどって意味のある発話を行うことを願い，児童の声を生かした授業展開にチャレンジしてみました。

そこで，児童が自分のチームの仲間にクイズを出し，当ててもらうというゲームを設定しました。ゲームというと対抗戦や勝ち抜き戦で常に勝敗を競って発話することが多かったのですが，今回は話すモティベーションを，仲間にわかってもらうという設定で次のような授業を組み立ててみました。テーマは「動物」で，以下は指導計画3時間のうちの最後の時間のレッスンプランです。

歌：“Little Peter Rabbit”を歌う。
復習：ペットに関するインタラクションを行う。
（種類，数，色，大きさ）
練習：ワードブックを使って動物タッチゲームをする。
（個人からペアへ）
・シルエットクイズWho am I?をする。
（panda, kangaroo, koala, monkey, giraffe, zebra, horse, lion, snake, penguin, elephant, bear）
ゲーム：スリーヒントゲームを行う。
（1チームが2つに分かれ，答える人とヒントを出す人に分かれる。ヒントは3つ。）

3. 子どもから学ぶ

この活動を進めるにあたって，一番心配だったのは，何をヒントにするかを考えさせ，その言葉を選んだうえでヒントを出すという2段階を踏ませることでした。1人でも2人で一緒に言ってもよい，ジェスチャーでもよいというルールにしました。“Do you like dogs?”の質問に“Yes, I do.”と答えることはできても，自分で言葉を考えて英語を言うのはかなりハードルが高くなってしまいます。「意味のある発話にこだわりすぎたかな」とためらいながらの授業でした。

しかし，実際に実践してみて気づいたのは，子どもたちは，思った以上に英語で自分の思いを伝えたがっているということでした。スリーヒントゲームは3つの英語のヒントを出して，答えを当てるゲームです。いつもは担任やALTが出す3つのヒントを手がかりに答えを言うゲームですが，今回は「聞いて考えて答えを出す」という段階から1歩進んで「自分でヒントを出す」という高度な活動です。難しいのでたぶん大方の児童はペアかグループで言うだろうと予想していました。ところが驚いたことにほとんどの子どもは1人で言っていました。

（グループで誰が何のヒントを言うかを6枚のヒントカードから選んで役割を相談します。）

ヒントの英語を担任とJTEに相談しているところ

また，子どもならではのヒントがたくさん出てきて非常に興味深く感じました。たとえば，“sheep”という答えのヒントで「ふわふわ」という口まねと手でそっと触るジェスチャーを付けていました。味方にクイズの答えを何とか伝えたいという気持ちが胸いっぱいに広がり，やっと出たヒントでした。その答えが正解になったとき，その子は満足そうな笑顔を浮かべていました。

英語の発話を促すために大切なことは，子ども一人ひとりの思いを声に出させてあげると同時に，言いたいという気持ちを起こすことです。無理にスキットをリピートさせる活動がいかに無意味かを改めてひしひしと感じました。以下は子どもたちの振り返りカードからの声です。

> スリーヒントゲームで当てたり，ヒントを言って当ててもらったりするのはむずかしかったけど，当たったときはすごくうれしかったです。またやりたいです。

> 少しきんちょうしたけど選んだヒントが言えて本当によかったです。今までで一番よくできたと思います。

これらの声から，子どもは，「少し難しいかな」というレベルにときどき挑戦することによって，英語に興味を持ち続けられるのではないかと思いました。聞くことをベースにしている英語活動ですが，時には話す必要性を与えてチャレンジさせてみてもいいかなと感じました。

4. 言葉を使う意味

毎回の英語活動を行って感じるのは，授業には「しかけ」が必要だということです。たとえば「月・日」がテーマのときは，12か月の名前と日にちに，児童が興味を持ち，気がつくと何度も聞いたり話したりするような活動とは何かを考えて悩みます。そして1年間の祝日や，先生方，友だち，有名人の誕生日などの話題を取り上げ，子どもに関心を持たせるような教材と指導方法を探っていきます。

日本語でも英語でも，言語というのは情報伝達の手段として人間に必要なものです。“What’s this?”と聞くのは，幼児が何を見ても「これなーに?」と親に聞くときです。幼児にとって心から知りたいから聞くのであって，目に見えてわかっている物を「これなーに?」とは聞きません。教師はときどきこの原則を忘れて教え込んでしまうので要注意です。やはり英語活動に「しかけ」は重要です。

5. 終わりに

平成23年度から高学年での外国語活動がいよいよ必修化になります。必修化を控えて各校が様々な準備を始めているときだと思います。私の勤務校では，昨年度まで国から英語活動地域サポート事業の指定を受けていたので，すでに3年生から6年生まで年間35時間の授業を行ってきました。そして今年は必修化に備えて，カリキュラムも『英語ノート』と新学習指導要領に照らし合わせて改訂を進めています。

必修化になっても変わらない英語活動の原則。それは，人と人とが言葉を交わす楽しさを子どもも教師も味わえるような活動をすることです。それこそが小中連携にしっかりと繋がっていくものと信じています。

実践報告 子どもたちが思いを伝え合う 本当の意味のコミュニケーション活動

静岡県沼津市立浮島小学校教諭　鈴木 智子

1. はじめに

沼津市では，平成18年度より言語教育特区として，言語科を新設(英語の時間と読解の時間を併設)し，「言葉を用いて積極的に人と関わっていこうとする態度の育成」を目標として研究を進めてきている。「英語の時間」においては，英語を使って，自ら進んでコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指してきた。

2. 「英語の時間」との出会いと歩み

3年前，「言語科」という新しい教科に向かい，まず教師自らが英語やALTに慣れ親しもうということで，授業には，「半分子ども，半分教師」の気持ちでのぞんだ。ALTへの教育技術面のアドバイスやALTの性格や気持ち，文化への共感，理解を大切にしながら，一緒に授業をつくっていくという姿勢で取り組んだ。そして，TTの望ましいあり方や異文化理解の視点，他教科他領域との関連を研究していくなかで，子どもたちが自分の意思を伝える必然性，必要感のある楽しい活動，すなわち「本当の意味のコミュニケーション活動」を目指すことが大切であるということに気づいていった。

3. 本当の意味のコミュニケーション活動のポイント

○Thinking time to encourage motivation(動機付け，気持ちを高める時間)を設け，new wordsに至るまでの過程(Reviewの段階)を大切にし，必要感のある学習をつくる。

○Full exposure to English(英語シャワー)により，子どもたちができるだけたくさんの英語に触れ，満足感が味わえるようにする。

○「知りたい・聞きたい・なぜ?」といった子どもたちの興味・関心と話す必要性のあるインフォメーションギャップのある活動により，子どもたち自らが問いかけ，意思やメッセージを伝えられる場面設定をする。

○意味のある質問(問答)や会話のできる活動，ALTを生かした内容，異文化理解(交流)，国際教育につながるPresentationやProductionを考案する。リスニングプロセスを大切にして，よく聞き，考えて話すグッドコミュニケーターとしての子どもを育てる。

4. 「英語の時間」研究3年目の実践(第1学年6月)

(1)題材名　ダン先生ともっとなかよしになろう

(2)題材の目標

ALTの話を聞き，一緒に遊ぶ活動を通して，オーストラリアへの関心を高め，ALTや友だちとのコミュニケーションを楽しもうとする。

(3)授業への思い

入学してから2か月という時期を考え，子どもたちの進んで聞きたい，話したいという気持ちや，ALTや友だちともっとなかよしになりたいという思いが生きる英語学習活動となるように，学級作り，仲間作りを基盤とした遊びにオーストラリアのことがらを関連させた構成とactivityを考案した。

(4)活動過程

1. Greeting	Hello, Dan.
2. Review	What colour do you like?
3. Warm-up	Let's do an Australian dance.
4. Presentation	Listen to Dan's speech about Australia.
5. Practice and demonstration	What kind of animals do you like? I like snakes. / I'm a snake.
6. Production	Let's play the Snake, Koala Pair Match Game.
7. Today's review	Today's MVP
8. Closing	Goodbye, Dan.
9. Feedback	Please write in your files.

Let's dance!
Koalas and snakes are famous animals in Australia.
"Let's play the Snake, Koala Pair Match Game."
"Snake, snake, what colour do you like?"
"I like pink."
"Pair please."
"Yes."

(5)授業のポイントと成果

①ALTの話をじっくり聞く時間を設け，その話の内容に対して，子どもたち自らが問いを持ち，反応し，思いを表現すること。

本授業では，PresentationそのものをALTの母国オーストラリアについての話とした。Warm-upで，ALTが子どものときに遊んだ踊り"Hokey Pokey"で動機付けを行ったあと，オーストラリアを紹介するような資料(地図，国旗，食料，動物の写真，ぬいぐるみなど)を提示しながら，ALTに話をしてもらい，異文化に対して興味を持たせていった。HRTはALTと一緒に実演や，話の内容をわかりやすく伝える支援をした。ただし，日本語に訳すことなくジェスチャーや表情，簡単な英語によって伝え，子どもたち自らが推測しながら聞き，相手の気持ちになって考えるようにした。子どもたちは，1年生なりに一生懸命話の内容を聞き取り，自ら疑問に思ったことを自然につぶやくまでになった。子どもたちがオーストラリアや英語が好きになるきっかけをALTが与えることができた。

②子どもや学級の実態を考えた学級作りを基としたactivityを設け，子どもたちが自分の考えや気持ちを伝えたり，相手(友だちや教師)の思いを考えながら，聞こうとする姿勢と思いやりの心を育てること。

本授業では，Presentationのオーストラリアの話を受けたDemonstrationでオーストラリアの動物を話題に取り上げ，Productionにつなげた。ここでのactivityは，オーストラリアの代表的動物コアラとヘビ，そして，既習の色の学習を取り入れたスネーク・コアラ・ペア・マッチゲームとした。このゲームは，コアラたちがオニのヘビと好きな色を問答しながら，ペア作りをするというもので，子どもたちは，自分の好きな色をうれしそうに伝え，友だちとペア作りを楽しんでいた。友だち関係を広げることを大切にしたいこの時期の子どもたちにとって，英語に触れながら，仲間作りにもつながり，学級作りにおいても有効な活動となった。

児童の感想

・英語が楽しかったよ。ダン先生といっしょで楽しかったよ。
・オーストラリアの旗と日本の旗は違うね。日本の旗は，真ん中に赤い丸があるね。オーストラリアの旗には星があったよ。
・オーストラリアの動物を初めて見たよ。オーストラリアに行ってみたいよ。
・スネーク・コアラ・ペア・マッチゲームをお友だちとやったことが楽しかったよ。コアラがかわいかったよ。ヘビもおもしろかったよ。
・ダン先生のオーストラリアの話が聞けてうれしかったよ。心がどきどきしたよ。

5. おわりに

振り返ると，「英語を教える」ことに問題を見いだしていた時期から，「英語で育てる」という考え方，小学校で英語教育をやる意味に気づかされていった3年間であった。言葉は心であり，人の心の言葉が生きる基となる本当の意味のコミュニケーション活動こそ，英語教育に求められるものであり，心を込めて生きた言葉を伝え合う児童を育てたいと考えている。日本語でも英語でも，一生懸命相手の思いを聞き，共感し，理解し，考えて，自分の思いをのびのびと発信できるような子どもの姿を願いながら，そしてまた教師自らも子どもの思いや声を聞くグッドコミュニケーターとして，これからの小学校英語教育の方向性を探りながら，子どもたちとともに歩んでいきたい。

Hooray ALT!

■(3) はっ「た」つ段階に合っている

In this corner, I suggest the "three「た」s" for good lessons.

(1)「た」のしい，(2)「た」めになる，(3)はっ「た」つ段階に合っている

This time, I will discuss the third「た」in detail. Students feel frustrated when the level of the lesson is too high. They feel bored when the lesson is too easy. Neither is good. Lessons need to be both age and level appropriate. Teachers need to understand their students' emotional and intellectual developmental stage.

The number of years a school has dedicated to English activities will largely determine a class' ability. Therefore, even though students at school A and B are the same age, their level may be very different. This is important to remember for us who teach at several different schools.

By gradually adding new layers to past knowledge through a spiral curriculum we can meet the various needs of the wide range of students we teach. There is still much more to say on these topics but I hope the "three「た」s" discussed in these issues gave you some ideas on how to fine-tune your lessons.

Christopher Kato（千葉県我孫子市ALT）

Information

第５回全国小学校英語活動実践研究大会

日時：平成21年1月30日（金）・31日（土）
場所：京都市内小・中学校／国立京都国際会館
詳細はhttp://www.zensyoei.jp/をご覧ください。

Say "Hello" with Alison!

根本 アリソン

イギリス出身･1989年より福島県で英語講師として活躍中

■イギリスの冬の光 ～Winter in the U.K.～

今回はイギリスのクリスマスを紹介します。みなさんは「ファーザー・クリスマス」という言葉を聞いたことがありますか。イギリスでは古くからサンタクロースのことをこう呼んできました。12月の初め頃，子どもたちはファーザー・クリスマスに手紙を書いて送ります。ファーザー・クリスマスは小学校にもたくさんのプレゼントを持ってやってきます。学校では他に劇やパーティー，カード交換などもあり，子どもたちにとってマジカルな時季です。

大人にとっても，クリスマスはとても忙しい時期です。友人や親戚に宛てて手書きのメッセージをそえたカードを1人で，100～200枚ぐらい送ったり，クリスマス・デコレーションとして，もみの木の他にも，赤い実のヒイラギや白い実のヤドリギなどを家に飾ったりします。イギリスの長い夜，町全体を照らすきれいなイルミネーションは，冬の寒さを忘れるぐらいすてきな気分にさせてくれます。

25日のクリスマス・デー当日は家族や親戚が集まり，教会に行ったり食事をしたりして静かに過ごします。午前中はファーザー・クリスマスにもらった新しいおもちゃで子どもたちが喜んで遊び，午後はみんなでクリスマス・プディングをいただきます。ドライフルーツ入りの真っ黒いケーキですが，家族ごとに代々伝わる特別レシピをもとに時間をかけて作られた，愛情がこもった甘い一品です。

小さいときにはもらうだけだったプレゼントも，今では自分の子どもに選んだり，送ったりするのが楽しみになりました。クリスマスは子どもにとっても，大人にとっても，一年でいちばん特別な行事です。Merry Christmas!

（福島県双葉郡大熊町　外国人英語講師）

小学校英語情報誌
Hello, Kids!
Vol.2-4（通巻8号）
定価120円（本体114円）
送料80円

平成20年12月1日印刷　平成20年12月5日発行（年4回発行）　編集兼発行人　山岸　忠雄
印刷所　株式会社興陽社　〒113-0024　東京都文京区西片1-17-8
発行所　開隆堂出版株式会社　〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1
☎03(5684)6121（営業）、(5684)6118（販売）、(5684)6115（編集）　http://www.kairyudo.co.jp

開隆堂出版株式会社
〒113-8608　東京都文京区向丘1-13-1　☎03(5684)6111
北海道支社　〒060-0061　札幌市中央区南一条西6-11　札幌北辰ビル8階　☎011(231)0403
東北支社　〒983-0043　仙台市宮城野区萩野町1-11-1　萩野町Mビル2階　☎022(782)8511
名古屋支社　〒464-0802　名古屋市千種区星が丘元町14-4星ヶ丘プラザビル6階　☎052(789)1741
大阪支社　〒550-0013　大阪市西区新町2-10-16　☎06(6531)5782
九州支社　〒810-0075　福岡市中央区港2-1-5　FYCビル3階　☎092(733)0174